

怒りや悲しみや憎しみの向こう側

大内三枝さんは2011年から滝野川を中心に世界第二次大戦の経験者に聞き取り調査をし、昔通ったきつね塚通信に記録して来た。これは偉業だ。というのは、戦争経験者は誰かに話したい、語り継ぎたい、語り継がねばならないという気持ちの一方で、語るには辛すぎる心中にあるからだ。大内さんには重い口もつい開いてしまう「何か」があるのであろう。

語り部はその時、被害者であると同時に、自分だけが生き残ってしまったという申し訳ない気持ちや、あるいは人の命の奪い合いや、飢えの最中であって、できれば蓋をしておきたいような壮絶な記憶が呼び覚まされる。語るためには、怒りや悲しみや憎しみを超えなければならない。

戦後が終わらない家庭で育った最後の世代である私たちは、家族のあり方他で影響を強く受けたが、戦争体験の当事者ではない。心咎めも壮絶な記憶も、己のものではない。できることといえば、なるべく正確に、その人々の、その人にとっての真実を伝えていくことなのかもしれない。

そしていかなる戦争にも「ノー」と言い続けることだ。

山本 亜矢